

森友

SHINYU
vol.02

林業機械に万全のサポート体制

サービスカレッジ 林業機械コースを開講

住友建機では当社サービスマンを対象に林業機械の整備技術を専門にしたサービスカレッジを開講。お客様への満足度向上のため、さらなる技術向上を目指して取り組んでいます。

迅速対応の部品供給体制を確立

お客様からのオーダーへ速やかに対応できるよう、林業機械アタッチメントの補修部品を弊社部品センターに常時在庫。迅速かつ確実な供給体制を確立しています。



住友建機の林業機械 LINEUP



バックナンバー

森友
SHINYU
vol.01



Contents

林業現場レポート



清洲林業株式会社
高知県
SH75X-3
KESLA 20SH



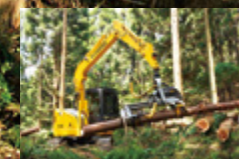
西垣林業株式会社
奈良県
SH200LC-5SM
スマックス仕様



松阪地区木材協同組合
三重県
SH135X-3B
選木仕様(ストレートブーム)



日和田林産有限公司
岐阜県
SH135X-3
KESLA 25SH



秩父広域森林組合
埼玉県
SH75X-3B
KESLA 20SH



三井物産フォレスト株式会社
北海道事業本部
北海道
SH120-3
KESLA 560SH

林業機械に万全のサポート体制

住友建機の林業機械 LINE UP



住友建機株式会社

〒141-6025 東京都品川区大崎2-1-1 (ThinkPark Tower) ☎03-6737-2600
ホームページアドレス <http://www.sumitomokenki.co.jp>

1208©05T-4



100年後の林業経営を見据えて。 道造り・集約化・機械化による低コスト化を推進。

溝渕林業株式会社

高知県南国市明見



林業の活性化へ向け 「道造り」に着手

香美森林副組合長と社団法人日本林業経営者協会の役員も務められている溝渕会長。先代は戦前の高知県の林業先駆者ともいえる方で、それを受け継ぐ溝渕会長は3代目である。溝渕家が本格的に林業に携わるきっかけは、明治時代にさかのぼる。悲惨な日露戦争を経験するなかで「国の為になることや、雇用確保などを通じて地元へ貢献したい」と考えた先代が拡大造林を始め、昭和26年から皆伐に着手。現在の保有林は約400haまでに至っている。

林業一家に育った溝渕会長だが、大学卒業後は農協中央会に勤められていたという。その後、家業を継ぐこととなり、昭和35年頃に三重の諸戸林業会長から1ドル道路（1ドル=360円で1m造ることができるといわれる）を教えられ道造りに着手された。まず1年目の昭和43年に1200mの道を造り、現在では200m/haにまで拡大している。

機械化により 林業を飛躍的にスピード化

その後、従業員の雇用と福利厚生を考え昭和42年に溝渕林業株式会社として法人化。会長のモットーは“歩く林業から走る林業”との



溝渕会長：自社林から伐出された90年生のヒノキの柱と杉の板で作られた事務所の前で



SH75X-3 (KESLA 20SH)

ことで、昔は現場まで歩いて通っていたが、法人化を契機に会社がバイク購入を補助し、当時は珍しかったバイクで現場に行くようになったという。また、昭和40年代まではソリ（木馬）で木材を搬出していたが、作業道整備を進めることで幹線は現場までトラックが入り搬出できるようになった。事業の機械化に対して、当時から積極的だったことが伺える。今後の林業については「100年後を見据え、道造り・集約化（団地化）・機械化を推進しながら林業経営を低コスト化していくことが重要」と熱く語る。木材価格は昭和55年をピークに下降し続けており、現在の補助金を受けないと経営が成り立たない実情は非常に情けないと嘆いておられた。

林業と環境を融合し、新たな世代へ そんな溝渕林業で働く現場のチーフは「従業員



整備された明るい自社林



左から、吉川さん、浜田さん、秦さん、窪田社長

員各人が役割に応じた個別目標を立て、立木を傷つけることなく安全確保に留意して作業することを心がけ、チームで段取りを立てて伐倒から搬出まで無駄のないように作業しています」と語る。また、住友ショベルについては「登坂力があり、狭い作業道でも斜面角度に合わせて枝払い、測尺、玉切り作業をスムーズに行えます」「KESLAは部品点数が少ないのも魅力」と高い評価をいただいた。また、社長の窪田さんは全農出身のため、違う側面からも林業経営を考えられているとのこと。「今後は『林業』と『環境』が一体となった集約型林業が必要。そして、会長が築いた森と道を守り、次世代に繋げていくことも重要な役割と考えています」と語られた。さらに「水を制する者は山を制す」と語る窪田社長。台風の通り道である高知県を知り尽くした、含蓄のある言葉であった。

平城遷都1300年祭への木材供給業者に任命された、 明治45年より続く老舗のこだわり。

西垣林業株式会社

奈良県桜井市



高性能林業機械により 作業の効率化を推進

創業明治45年の老舗、西垣林業。以前は10万円～50万円/m³以上する高級原木を地域製材所へ供給する役割を担っていたという。現在も木材の仕入販売を主業にしており、山元からヘリで集材された大量の原木を取扱っている。販売する際はお客様が裏側も見られるよう平積みをするため広大な面積が必要となり、総面積は1万坪に及ぶ。そのなかで重要な作業が木材の選別。かつては軽い原木は人間が肩に担ぎ、節の有無や木味・曲がりなどで選別・桎列し、太い・長い原木はクレーンで吊り上げ二人で検査していたというが、現在はコストと効率を考え、桎列・積み込みを油圧ショベルベースの超ロングリーチ『スミマックス』での作業に移行。榎田執行役員からは「作業半径が広く・重い物を高く持てるので、2列配列やトレラへの4列積みが可能で重宝している」との評価をいただいている。

妥協のない活動が呼び込んだ 栄誉ある役割

西垣林業はこの地域の銘木『吉野材』も手がけている。間隔を狭く密植することで成長



桜井本社市売部担当 榎田実執行役員



SH200LC-5SM (スミマックス仕様)

を抑えて年輪幅を小さくし、枝打ちは若木のころから定期的に行い無節化に努めるという手間のかかる植林方法を50年にわたって続けてきた。横谷部長は「わざわざ手間をかけるのは将来への投資。他の地域の方にはとても真似できないといわれます」と語る。そんな西垣林業に、うれしい話が舞い込んだ。平城遷都1300年祭が行われることとなり『第一次大極殿』の屋根の垂木に使用する数百本の檜と『遣唐使船復元』に使用するすべての杉を供給することとなったのだ。要求された木材は樹齢80～90年の杉で、なおかつ湾曲した状態の原木を70～80本。東吉野の自社林を含め、要求を満たす木材を必死で探したという。



菊岡作業長

確かな安定性と故障の少なさに 絶大な信頼

なるべくコストをかけず、作業の効率化に配慮しているという菊岡作業長はスミマックスについてこのように語る。「クローラ式の安定感がなよりの魅力ですね。さらに、住友スミマックスは耐久性も抜群で、機動性や微操作性にも文句のつけようがありません。当社では最近購入したSH200LC-5SMで6モデル目になりますよ」と絶大な信頼を寄せられている。また、メンテナンス面について伺いすると「なによりも故障がありません。機械的にメンテナンスを要するのは1年に数回あるかないか。決してお世辞ではありませんよ（笑）」と笑顔で語っていただいた。菊岡作業長の生き生きとした表情が、平城遷都1300年祭開催にともなう西垣林業の活気を雄弁に物語っていた。



市売部 横谷圭二郎



「エコブランドあかね材」を全国に広めたい。 新たな取り組みで国産材の活用促進に邁進中。

松阪地区木材協同組合

三重県松阪市木の郷町



■ 国産材の需要拡大に工夫が必要

松阪は古くより吉野材、波瀬材、尾鷲材、紀州材と全国ブランドを擁し良質な木材の集散地として栄えてきた。昭和25年創業の松阪地区木材協同組合は21世紀にはいつて木材コンビナート「ウッドピア松阪」に参画し連合体として市売事業（製品・素材）で県内トップクラスの木材流通業者として、その地位を築いている。

松阪地区木材協同組合7代目の理事長となった黄瀬稔理事長は、いま新たな取り組みで国産材の活用促進に力を入れている。「住宅着工数が今40年前のレベルの80万戸を割る状況にあつて材価の低下、国産材の需要の低迷など業界にとって苦しい状況が続いています。60年の歴史を誇る組合も生き残るためには木材の需要拡大のために工夫が必要なのです」



黄瀬理事長

■ 産学協同研究で「あかね材」の有効活用に取組む

現在、黄瀬稔理事長はスギノアカネトラカミキリの幼虫による喰痕材「あかね材」の有効活



SH135X-3B 選木仕様（ストレートブーム）

用を図るために三重大学と産学協同研究し、「あかね材」の安全性を証明し、将来的には「エコブランドあかね材」を使つての環境まちづくりを目指している。最近では大手のハウスメーカーからも環境に貢献する材として使用したいとの申し出が相次いでいるという。そのほかにも「木の情報館」「すまい体験館」をつくり、木の住まいの情報活動や松阪の木で家を建てるネットワーク作りにも力を入れている。また機械化にも積極的で古くからの付き合いのある（株）大松自動車の勧めでSH135X選木仕様を導入、当社販売代理店の（株）キナンのサポートもあり作業の効率も向上したという。



オペレータの大西さん

■ 「コンクリートから木へ」をテーマに

新たな政府になって「コンクリートから人へ」というスローガンが掲げられた。林野庁は「コンクリートから木へ」というテーマで国も林業に力を入れたことに大きな期待をしているという。森林資源と暮らしをつないで60年。行政と共に国産材の利用促進に取り組みながらも、最近では親子木工教室の開催など次世代を担う子供たちに松阪の木の良さを実感してもらい、環境・情操教育などを通し「木育」を定着させたいという松阪を愛する強い気持ちを持っている黄瀬稔理事長である。



国有林間伐推進コンクール優秀賞が物語る、 山、野生動物、そして林業への深い愛情。

日和田林産有限会社

岐阜県高山市高根町



■ サービス業の精神で お客様も山も喜ぶ林業を

平成21年度の国有林間伐推進コンクールで優秀賞を獲得するなど、林業の改善に日夜努めている日和田林産有限会社。上田榮勇社長はこのように語る。「サービス業と同じ気持ちでやるのが大切。お客様が喜び、木も喜ぶ林業でなければダメ」また、周辺環境や生物多様性にも配慮されている。「国有林内での作業では人間の背丈しか伸びていない木は切らずに残す。絡んだ葛も全部採らない。絶対に木に傷をつけず、一番良い木を残すように」と常に社員へ指導されているという。そんな地元の山には現在も多種多様な野生動物が生息しており、豊かな生態系が守られている。上田社長の想いは、しっかりと反映されているようだ。

■ 測尺精度、枝打ち能力、 小旋回性能に太鼓判

日和田林産では、すべてのメーカーの造材機をリースやデモで試した結果SH135X-3



上田榮勇社長



SH135X-3 (KESLA 25SH)

KESLA25SHに決めた。「測尺精度が一番良かった。梅雨時は木の皮が剥けてエンコーダが滑り短くなりやすい。たとえば3m材の場合、2m99cmになったら損害。梅雨時は他のメーカーの造材機はすべて狂ったけどこの機械は大丈夫だった」と語る。さらに「伸縮式は力があるので枝打ちが一度でできる。回転式は惜性が付けば打てるけどそのぶん機械が傷む。いまのところ造材機ではあれが一番。小旋回が効くことも選んだポイント」と太鼓判を押しているという。「市場で切り口が綺麗だと喜ばれる。とくに大木は斜めに切れているだけでNG。社員には切り口はピシッと揃えろと指示を出している」と妥協のないこだわりを語られた。

■ 後継者の発掘へ向け体験型の イベントを実施

また、同社では林業後継者を確保する活動としてツリークライミングのイベントを実施している。木登りをはじめ、マッチ3〜4本で火をおこすノウハウ、丸太を手ノコで切る場合とチェーンソーで切る場合との違いなどを体験してもらっているという。上田社長の弟・康美専務は、林業の後継者に向けて「林業は危険というイメージがあるかもしれませんが、決まりさえしっかり守れば山の仕事はクルマの運転より安全」と力強く語る。また、同業者の方にも「ケガに注意して頑張りましょう!」とエールを送られ

た。最後に、住友建機のサービスについて伺いすると「朝の5時から現場に来て、8時から作業できるように仕上げてくれる。対応も早い担当者人間性も素晴らしい」とお褒めの言葉をいただいた。「鳥が鳴かない山はダメ」と語る上田兄弟。周囲の山々からは、やがてより多くのさえずりが聞こえてくるだろう。



上田康美専務



日和田林産有限会社の皆さま



山の木々のようにすくすくと育つ新たな世代。 信頼関係に支えられた地域の未来は明るい。

秩父広域森林組合

埼玉県秩父市寺尾



■ 山にやさしく。人にやさしく。

平成14年に秩父市森林組合をはじめ8つの組合が合併して発足した『秩父広域森林組合』。組合員は約4300名にのぼり、埼玉県下で最大規模を誇る。組合の事業の中心は、地域の山主からの委託による森林整備。2伐3残を目標に列状間伐を行なう同組合は、とくに路網整備に注意を払っているという。特徴的な取り組みが、伐採した木の皮や枝を道にすきながら整備していくという手法。「本来は産業廃棄物となる皮や枝を有効に活用することで、エコロジーにもつながっている」と峯林産課長は語る。

また、山主へできる限り収益を還元することをモットーにしているという。「当組合では相場より高い還元額を目標にし、伐採から木材の販売まで一括で受託している。今後も山主との良好な信頼関係を維持しながら、この地域の林業の発展に貢献していきたい」と言葉に力を込めた。

■ 20年後、30年後を見据えた人材育成

峯林産課長の地域発展への想いは、新しい人材の確保にも色濃く反映されている。同組合では失業問題への貢献策として全国から就林者を募っており、東京都心などからも就



峯課長



SH75X-3B (KESLA 20SH)

職希望者が訪れるという。結果、高齢化が懸念されている農業・林業の世界にあり、同組合の平均年齢は41歳と若い。また、技能職員への待遇も手厚い。

峯林産課長は語る。「林業だから低収入でいいというわけがない。すべての職員が安心して暮らせるよう、待遇や福利厚生には力を入れています」一方、意識が低い就職希望者には釘を刺す。「林業は遊び半分でできる仕事ではない。相応の覚悟がなければ決して続きません」峯林産課長の厳しい言葉から、林業、組合、そして組合員への深い愛情を垣間見ることができた。

■ 「木」の価値が見直される日を願って

同組合では林業の機械化も積極的に推進している。GISで山の管理を行ない、情報をデータ化する取り組みもそのひとつだ。また、林業



中野班長



の現場で組合トップクラスの成績をあげている中野さんは林業機械のエキスパート。「もともと機械が好きで、個人的に勉強していました。海外の動画を研究することもあるんですよ(笑)」そんな中野さんはKESLAについてこのように語る。「ローラーと違って檜の太い枝も払ってくれるので作業効率が高い。また、掴む力が強いのでストレスを感じることなく作業することができます」現在「中野班」の班長を務める中野さんは、後進の指導にも積極的だ。「若い人も増えているので、機械の扱い方など僕にできることはどんどん伝えていきたい」と優しい笑顔で語ってくれた。

最後に峯林産課長はこのように語った。「最近では“家を建てる”ではなく“家を買う”ということが多い。実際、いま売れ行きが良いのは集成材用の丸太です。もう一度、無垢材が見直されることを願っています」峯林産課長が見上げる山には、伐期を迎えた檜が青々と茂っていた。

山に棲む野生動物の多様性を守りながら、 約35,000haにおよぶ広大な社有林の維持・管理を推進。

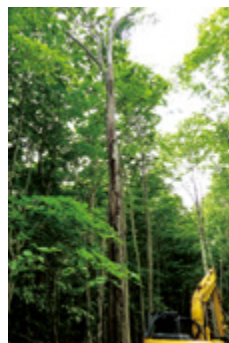
三井物産フォレスト株式会社 北海道事業本部

札幌市中央区北5条



■ 自然を慈しみながら 広大な森林を管理

全国73カ所にある三井物産の社有林は約44,000haにおよび、東京23区の面積の約7割に相当する。そのうちの8割が北海道に位置しているという。そのなかで、三井物産フォレスト(株)北海道事業本部は同社の森の維持・管理を主な目的とし、環境・生物多様性・社会的側面を重視した運営を行なっている。久保常務取締役事業本部長は「FSC(森林管理協議会)、SGEC森林承認の取得後、環境や安全に関する考え方が会社として大きく変化した」と語る。部下にも常日頃から「自分の目で見て、山をよく歩くように」と指示しているという。また、木にやさしい山づくりも同社のモットー。クマゲラが生息している木はたとえ朽ちていても伐採せずに残すなど、野生動物への愛情も深い。



クマゲラの餌場の枯れ木



久保常務取締役事業本部長



SH120-3 (KESLA 560SH)

■ 高性能林業機械の導入により コスト削減を推進

育林方法は「循環林」と「天然生誘導林」に大別して管理している。天然生誘導林は低コストで行なえる更新方法だが、近年は利用価値の高さから循環林である唐松の造林が増えているという。そこで、高性能林業機械の導入により効率化を図り、トータル経費を削減することとなった。造材機に求めることはスピードより正確さであると語る。「従来の回転式はスピードに優れているが測長に狂いが生じ歩留まりが悪い。伸縮式は測長が正確で枝打ち力にも優れているので、楸松の枝のように対生に密集している木や硬くて太い唐松の枝打ちには最適です」立木の伐倒時における安全性、重労働となる手切り伐倒を省略するためにも、ストロークハーベスタ(SH120-3 KESLA560SH)の導入に踏み切ったという。

■ 愛情と経験を惜しみなく注ぐ ベテラン兄弟

第2事業部平取山林事務所が管轄する山で、楸松の1伐3残列状間伐に従事する渋谷さん兄弟を訪ねた。兄の均さんは定年後の再雇用で作業道の開設を、弟の紀巳さんは伐倒、支障木の根っこ部分の玉切り、中間土場までの集材と山土場での造材作業を担当する。経験は二人あわせて約90年になる

という。印象的だったのが「鳥が棲んでいる立木は可能な限り残す、虫が付いている立木は鳥の餌場なのでいじらないようにしています」との言葉。また、均さんは「色々なお客様に山を案内することは、自然の大切さを知ってもらえるいい機会。大変光栄です」と笑顔で語られた。長年の経験をもとに若い人達へ技術を伝承するお二人の背中に、自然への深い愛情と職人魂を垣間見ることができた。



渋谷均さん(SH120-5 木材グラブ仕様)



左から渋谷紀巳さん、林所長、田中所長代理、三浦さん(新人)